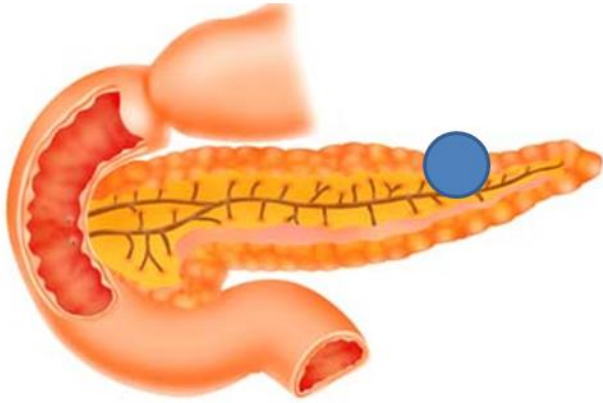


膵のう胞

●膵のう胞とは

のう胞とは液状成分が溜まった球状のものという意味です。つまり、膵のう胞とは膵臓にできた液体が溜まった袋状のものです。



●膵のう胞の症状

症状は通常ありません。しかしのう胞の種類によってはお腹が張る、痛いといった症状が出る場合があります。

●膵のう胞の種類

膵のう胞と一言で言っても何種類もあります。大きく分けると腫瘍性ののう胞と、腫瘍性でないのう胞に大別されます。

検診等で指摘されると「膵のう胞」や「膵のう胞性疾患」という病名で精密検査目的に専門医受診するようと言われると思いますが、膵のう胞は大まかな括りです。膵のう胞の種類が何であるかを精査するために専門施設受診となるのです。

腫瘍性ののう胞の中には、膵管内乳頭粘液性腫瘍（IPMN）、粘液性のう胞腫瘍（MCN）、漿液性のう胞腫瘍（SNs）が代表的です。すぐに手術が必要なものから定期的な経過観察が必要なものまで様々です。また、少し意味合いが異なりますが、膵癌による膵液の貯留のう胞も大きく分けると腫瘍性ののう胞と言えます。

これらが疑われた場合には精密検査が勧められます。

腫瘍性でないのう胞には、アルコール多飲者や自己免疫性膵炎の患者さんにみられる膵仮性のう胞や、膵リンパ上皮のう胞等が知られています。

腫瘍性ののう胞	IPMN、MCN、SNs、膵癌によるのう胞
腫瘍性でないのう胞	仮性のう胞、リンパ上皮のう胞

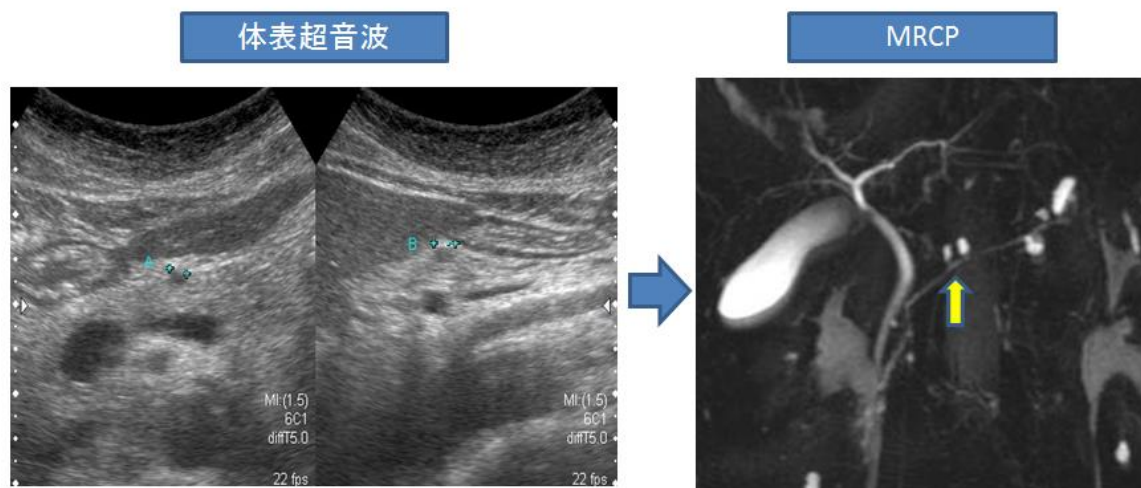
●膵のう胞の検査、診断、治療

膵のう胞であれば MRCP か CT・超音波内視鏡での検査になります。

MRCP とは MRI 検査の一種です。液体の存在する部位を強調して画像を撮像できるため、膵管内の膵液を強調することで膵管の形や膵管とのう胞との位置関係が分かりのう胞の種類の特定に役立ちます。

CT では造影剤を用いた膵ダイナミック CT という検査を行います。MRCP とは違う角度からのう胞を詳しく調べることが出来ます。

超音波内視鏡（EUS）とは胃カメラの一種です。EUS は胃カメラの先端に超音波のプロープが搭載されており、胃や十二指腸から膵臓や胆管、胆嚢等を観察するのに適した検査です。CT や MRCP で観察できない内部の詳細な構造や小さい腫瘍などを観察することが出来ます。MRCP や CT よりも少し大変なので必要に応じて行っています。



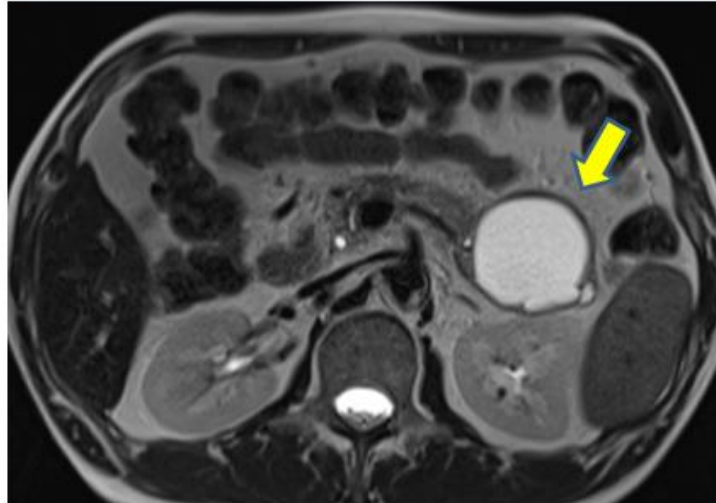
上記の検査で手術を要する可能性のある膵のう胞であると判断された場合には入院での追加精査を行うことがあります。（のう胞の種類によっては入院検査なしでそのまま手術になります）

具体的には、IPMN であれば国際ガイドラインに則って（サイズや、のう胞内の結節の有無等で判断）、内視鏡的逆行性膵胆管造影（ERCP）を行って膵液を採取して細胞診を行います。IPMN ののう胞は膵管と交通があるので、膵液を採取することで IPMN の細胞が採取でき、その結果で手術適応を決定します。

また、のう胞が膵癌によるものと考えられる場合は膵癌に対して超音波内視鏡下穿刺吸引法（EUS-FNA）を行って診断をつけます。

上記の ERCP、EUS-FNA を行う理由は画像による診断だけではなく腫瘍細胞を実際に採取して病理学的（顕微鏡で細胞をみる）に確定診断をつけるためです。

アルコール多飲者にできた仮性のう胞



● 当院での膵のう胞の治療について

膵のう胞は上記の様に、①基本的に心配のないもの、②発がんリスクが低いものの有るため定期的な経過観察が必要なもの、③発がんリスクが高いため手術が必要なもの、④がん に分けられます。検診で発見される膵のう胞は、②の発がんリスクが低いものの有るため定期的な経過観察が必要である IPMN であることが分かっています。当院では多くの IPMN の方が定期的に通院していますが、IPMN はがん化することがあります。当院でも、手術が必要になり入院精査の後に外科で手術を受けられる方がおられます。このような他診療科との連携により、早い段階で膵癌の治療が出来ます。また、中には MCN の方もおられ、手術を受けています。

検診の段階ではどののう胞なのか判別することは困難であり、その診断には専門的な知見が必要となりますので検診やドック等で指摘された際には当科に気軽にご相談をいただければと思います。